

2021年10月31日 佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書1章40～45節

説教題：手を差し伸べて

私は学生の頃、キリスト者学生会という聖書研究会に属していて、顧問の先生やクリスチャンの学生の方々と良い交わりを持たせて頂きました。ある時、恐らくイエス様がツァラアトの人を癒す箇所—(まだ聖書に「ツァラアト」という言葉は使われていませんでしたが)—を学んでいた時だと思えます、「砂の器」という映画の話になりました。「砂の器」は、父親がハンセン氏病に冒されたため、村を追われ、父親と息子がお遍路姿で全国を放浪する、病気の苦しみ、社会の差別、そういったものが背景となっている映画です。聖書研究会の先輩が「あれは名作だ、映画館は上映する映画がなくなると『砂の器』を上映する」と言いました。当時、私は家庭教師のアルバイトで中学生を教えていましたが、中学生が「先生、映画に行こう」と言ったので、「砂の器」を見に連れて行ったのを覚えています。中学生には難しい映画で、彼は可哀そうに眠っていましたが、確かに見ごたえのある、また考えさせられる映画でした。「聖書」のツァラアトとハンセン氏病は違います。その病気が、今では良く分からないから、「新改訳聖書」は、当時の呼び方のまま「ツァラアト」と書いています。(「新共同訳聖書」は「重い皮膚病」と訳しています)。しかし、病気は違いますが、ハンセン氏病の方が筆舌に尽くしがたい苦しみを経験されたように、病気の苦しみ、そして社会の差別の中を生きなければならなかった、その苦しみは、共通のものがあったのではないかと思うことです。

今日の箇所は、イエス様がそのツァラアトの人を癒される記事です。「内容」と「適用」と2つに分けてお話しします。

1. 内容～イエスの憐れみと怒りの御業

ここに1人のツァラアトに冒された人が登場します。ツァラアトに冒された人は、大変な病気だというだけでなく、「宗教的に汚れている」とされました。そしてその人に触れた人もまた「汚れた者」とされたのです。だからその人々は、町から追放され、町はずれの人が寄り付かないような場所で暮らさざるを得なかったのです。(ガリラヤの場合は、サマリアとの国境地帯に追いやられたようです)。しかも移動する時には、他の人が誤って触れないように「汚れた者が通ります、汚れた者が通ります」と言いながら歩かなければなりませんでした。人々から忌み嫌われ、蔑視を受けて生きて行く、その苦痛はどんなに激しいものだったのでしょうか。彼はそのような状況を生きていた人でした。

その彼が、イエス様の許に来て、ひざまずいて癒しを願うのです。彼の姿は私達に教えます。彼は「ひざまずいて」必死に願いました。しかも「お心一つで、私をきよくしていただけます—{『御心ならば、わたしを清くすることがおできになります』(新共同訳)}(40)と、「イエス様には癒す力がある」と信じて願いました。同時に「御心ならば」とイエス様の主権を認めて謙虚にすぎりました。必死に、信じて、しかも謙遜に、祈りの姿勢について教えます。それに対してイエス様はどうされたのか。41節に「イエスは深くあわれみ、手を伸ばして、彼にさわって言われた。『わたしの心だ。きよくなれ。』(41)とあります。ある英語の聖書は「私はそうしたい。清くなりなさい」(メッセージ訳聖書)と訳しています。イエスは手を伸ばして、彼に触れて、癒されるのです。

「手を伸ばして、彼にさわって」(41)という行為の中に、私達の信じるイエス様がどういう方か、それが良く表れています。この人は、もう長い間、人に触ってもらったことがない人です。人が自分に触らないように「汚れた者が通ります」と言って生きなければならなかった人です。ハンセン病の方の手記を読んだことがあります。隔離施設の近くの店に買い物に行くと、店の人がおつりを、手が触れないように、投げ落とすように渡したそうです。そのことの屈辱、情けなさ、それが切々と綴られていました。(もちろん、私には、お店の人を裁く資格はありませんが)。しかし、そうであればこそ、イエス様があえて触って癒されたことの意味を感じます。イエス様は、きっと一番酷い部分に触られ

たのではないのでしょうか。この人にとって、病気が癒されたことはもちろんでしょうが、触れてもらったこと、それは、彼がこれまで負ってきた重荷が受け止められた瞬間、人格(人権)が回復された瞬間ではなかったかと思うのです。イエスは、体だけではなく、心まで癒された、そう言えるのではないのでしょうか。

イエス様の癒しの動機は、憐れみでしたが、手を差し伸ばされたところにイエス様の憐れみが表れています。(私に信仰について大きな影響を与えて下さった高齢の兄弟がおられますが、ある会議の席上で声を震わせながら「キリスト教とは憐れみです」と言われた言葉を忘れることはできません。「キリスト教とは神の憐れみの宗教であり、神に憐れまれた者として憐れみに生きる宗教だ」と言うことでしょう)。「詩篇」を読むと、「詩篇」の詩人達も、ただ神の憐れみにすがって祈っています。私達が、自らの足りなさ、弱さ、醜さ、頑なさ、そういうものを知りつつ、なおも神に顔を上げて行ける、それも、神が憐れみ深い方であるからです。様々な弱さを覚えながらも、信仰をもって求める、それに対してイエス様が憐れみ深く答えて下さる、信仰の祝福を思います。

しかし、ここにあるのはイエス様の憐れみ深い姿だけではありません。癒された後、イエス様は「彼をきびしく戒めて…彼を立ち去らせた」(43)とあります。「叱りつけて…追い出した」ということです。何を叱りつけたのか。1つは「だれにも何も言わないようにしなさい」(44)ということであり、2つ目は「…行って、自分を祭司に見せ…人々へのあかしのために、モーセが命じた物をもって、あなたのきよめの供え物をしなさい」(44)ということでした。

順序が前後しますが、「自分を祭司に見せ…供え物をしなさい」(44)というのは、「ツアラアトから癒された」と診断し、それを社会に向かって宣言するのは祭司の仕事だったからです。祭司に「癒された」と宣言してもらった時、その人は、子羊等の供え物をする等、複雑な儀式を経なければなりませんでしたが、それによって社会に復帰することができたのです。

しかし、なぜイエス様は叱りつけるようにして彼を追い出されたのでしょうか。彼は人々から差別を受けて、社会から追い出されたのです。そして社会の外で暮らしていたのです。しかし今度は、自分を差別した社会に帰って行くのです。彼の中には恐れや躊躇があったはずですが。辛い経験はトラウマになって、彼の心を圧迫していたでしょう。また、帰っても、差別や偏見がもの見事になる、ということはないでしょう。41節の「イエスは深くあわれみ」(41)を、ある「有力な写本(古いオリジナルに近い聖書)」は「イエスは激しく憤って」と書いているそうです。そう読むなら、この人をそのような状態に追い込んでいるもの、人の苦しみに同情し得ない人々、また人の苦しみをそのままにしている社会、そのようなものに対して、イエス様は、怒りを含んだ悲しみを込めて、怒りと彼への憐れみの混じったような感情をぶつけておられるのかも知れません。イエス様は彼の恐れと躊躇を知っておられ、「戦いが待っているかも知れない社会、しかしそこがあなたの生きる場所なのだ。ここから出てそこへ帰って行きなさい」と、強く背中を押すような励ましの言葉を語られたのかも知れません。

しかしもう1つは、「だれにも…言わないようにしなさい」(44)ということでした。それは、人々がイエス様の「救い主」としての働きを間違えて理解しないようにするためです。イエス様は、現実の苦しみから私達を救い出して下さる方であり、今でも祈りに答えて奇跡的な癒しをして下さる方です。イギリスのある有名な聖書学者によると「祈りによって奇跡的な癒しが為される可能性は5%」だそうです。5%もある。だから私達は「御心ならば癒して下さい」と心を合わせて祈るのです。

しかし、イエス様の差し出しておられる恵みは、ただ1回の癒しだけではない、生涯に渡る恵みであり、さらに私達がどうすることもできない死の壁さえ越える、永遠に至る恵みです。ある方は、教会の祈りによって癌が奇跡的に消えたのですが、間もなく教会から離れて行かれたのです。残念です。イエス様は言われました。「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があるのか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか」(マタイ 16:26)。病気が癒されることは切実なことです。(私も今回の虫垂炎の苦しい経験から、心底そう思います)。しかしそうであっても、

永遠というものがあるなら—(ある神学者が言いました。「アメリカの西海岸から東海岸までリボンを持って、最初の 20cm がこの世の生涯、残りの全てが永遠の命である」。であれば)—天秤にかけるわけではありませんが、永遠の救いの方がより重要ではないでしょうか。

しかしそのためには、「神様との人格的な関係」に入ることが何よりも大切なのです。そこから真の恵みは始まるのです。イエス様は、人々にそれを得させるために来られたのです。私達を変えるのは、自分の罪を認めて、神の前に砕かれ、赦しを請い、遜って神を仰ぐことです。その時に、私達の中に、神様が望んでおられる形での神様との人格的な関係が始まるのです。人々がイエス様の奇跡だけを求めて、肝心の神様との関係に入ることがどこかに飛んで行ってしまふ、そのようにならぬように、「だれにも…言わないようにしなさい」(44)と言われたのです。

2. 適用～祈ること、永遠を思うこと

この記事は信仰生活に何を語るのでしょうか。私達が差別や偏見から自由になる、ということもあると思います。しかしそれ以上に、祈りについて語っているのではないのでしょうか。

ツァラアトの人にとって、イエス様に近づき、イエス様の前に出るとは、大変なことだったはずですが、しかし、それでも彼は来たのです。なぜそこまでしてイエス様の前に出たのでしょうか。「イエスにそのおつもりがあれば、イエスは癒すことができになる」と信じたからです。私は、この出来事の全体が、私達に、神の前に出て心からの願いを祈る、そのことの大切さを教えていると思います。聖書は、「あれが欲しい、これが欲しい」という私達の自我を助長するような信仰は教えません。しかし一方で「主はあなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる」(イザヤ 30:18)、神が祈りを待っていると、イエスが助けようとしておられると、教えるのです。イエス様も「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます」(マタイ 7:7)と言われました。「あなた方の心からの願いを何でも祈り求めて良い」と言われたのです。同時に「あなたがたの天の父は、求める者に良い物をくださるにちがいない」(マタイ 7:11 新共同訳)とも言われました。「聖書」は、そのような、神に単純にすぎる信仰を勧めるのです。

確かに必死に祈っても、癒されないことがあります。私達は、辛い経験をします。なぜ、祈っても癒されないのか。私達には分かりません。それでも、「祈っても祈らなくても同じではないか」、「結局、何も変わらないのではないか」という不信仰ではなく、「祈りは物事を変える」という信仰を生きることを、期待されていると思います。私も、心を病んで、病院のスタッフに「死にたいですか」と聞かれるような状況になったことがあります。「ああ、こんなところまで落ちたのだ」と心のどこかで思いました。「このトンネルから抜け出ることがあるのか」、心が押しつぶされるような日々を過ごしました。しかし、そこに神が手を伸ばして、不思議に癒して下さったのです。妻も、もう治らないかも知れないというような状態から、神様に癒して頂きました。一昨年来て下さった佐藤先生は、「奇跡はある、神様が必要だと思われたら奇跡が起こる」と言われました。私達は、神様(イエス様)の恵みと憐れみ、何より力を信じて、癒しのために、様々な問題の解決のために、祈り続けて行きたいと思うことです。

しかしこの個所は、イエス様の憐れみ、祈りの大切さ、それを教えると同時に、永遠の救いをこそ思うことの大切さをも教えるのです。イエス様に止められたにも拘らず、結果として「彼は…この出来事をふれ回り、言い広め始め」(45)ました。彼はイエス様のことを「イエスは癒し主だ」という形で言い広めたのでしょうか。しかし「マルコ福音書」は、これを否定的に表現します。それは、イエス様は、人々がご自分のことを、ただ「奇跡的な業をすることのできる人」という形で信じる信仰を願われないからです。申し上げたように、人々が真に自らの罪を悔い改めて、イエス様を通して—(十字架の赦しを通して)—神様との人格的な関係に入り、それによって神の国—(神の恵みの支配、神の保護下

である世界)―を生きようになること、それを願われたのです。そこに、永遠に続く祝福があるからです。イエス様は私達にも、罪を認め、遜って神を見上げ、赦しを感謝して受け取り、神の憐れみの中を生きようとする、そのような、悔い改めの信仰を生きようことを願っておられるのではないのでしょうか。それこそが永遠に続く救い、祝福、永遠の命の希望に生かされる信仰だからです。

「百万人の福音」に遠藤芳子という方のお証しがありました。この方のご主人は、牧師であり、神学校でも教えておられた方です。ところが 46 歳、これから、という時に ALS(筋委縮性側索硬化症)という難病の宣告を受けるのです。私も ALS の方を数年間、お見舞いしたことがあります。本当に大変な病気です。姉妹は「突然、崖から突き落とされたような、そんな恐怖でした」(遠藤芳子)と書いておられます。しかしご主人は、驚くほど見事な様子で、病気を受け入れ、「命の許される限り、全力を尽くすのみ」と言って奉仕を続けられたのです。ご主人は、ご自分の本のあとがきにこう書いておられるようです。「十字架で私の罪のために身代わりの死を遂げてくださったイエス・キリストが復活なされ、永遠の命の恵みを約束してくださった。そして、まだこの福音に仕えることを許していただいている。今こそ『しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません』(ガラテヤ 6:14)とのパウロの叫びに強く共感を覚える者である」(遠藤嘉信)。そしてやがてご主人の目は、天国に向いて行ったそうです。「神の前に立たされる時、キリストの十字架のゆえに罪なしと宣言されるんだよ。何てありがたいんだろうね」(遠藤嘉信)。姉妹は書いておられます。「突然、難病によって死と向きあわされながら、しかし死で終わりでない永遠のいのちに生かされる恵みがどれほど素晴らしいものか、主人は身をもって見せてくれました」(遠藤芳子)。

長く引用させて頂きましたが、このお証しは、イエス様が私達に与えたいと思われた究極の祝福について語って下さっているように感じます。誰もが、やがて死を迎えます。避けることはできません。だからこそイエス様は、十字架に架かり、私達を神に受け入れられる者として下さり、また復活して、私達に永遠の命の希望を与えて下さいました。そのことを、私達は見失ってはならないと思います。もちろん、現実の問題に対して、主の不思議な御業を、主の恵みと憐れみの御業を、期待して祈って行かなければならないし、私達にはそうすることが赦されています。主にある祝福、希望、癒しを、誰かのために取り次ぐ特権も与えられています。感謝です。しかし最終的には、全てのことを主に任せて、永遠の救い、永遠の命の希望をこそ、何よりも大切なこととして、信仰生活を送りたいと願うのです。